

4. こども虐待ボーダーライン事例に対する助産師の支援

平成25年度の支援の実態について

斉藤ひさ子（分担研究者） 国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究所 助産学分野

研究要旨

こども虐待の発生予防、早期発見・早期対応を行うために、周産期における妊産婦ケアに携わっている助産師が支援しているこども虐待ボーダーラインの実態を明らかにすることを目的に、九州地区5県37施設を対象に郵送による自記式質問紙調査を行った。132名に調査用紙を配布し68名（回収率51.5%）から回答を得た。

助産師の4割はこども虐待の母子事例の経験があり、3割にネグレクト事例の経験があった。疑いを含むこども虐待事例の平均経験数は1.3事例で、1～2事例が主であった。助産師は妊婦の定期健康診査時や産褥入院期間中の母児の観察、産褥期の健康診査や電話訪問の機会を通してこども虐待の事例を把握していた。

母親には経済的困窮、育児支援者がいない、実家と不仲である、などの背景があり、精神疾患未治療、知的障害、被虐待経験があるなどの生活や健康に関する問題を持つ事例の特徴を有していた。

職場のこども虐待の予防や支援対策について助産師の31.4%が「できている」と回答しているが、「できていない」とする回答33.9%、無回答33.8%と3分している。「母乳ケアや育児の継続支援システム」「新生児の健康診査・電話訪問の助産師による対応」は70%以上の実施であったが、妊娠届や母子健康手帳交付時の助産師の面接、退院時のハイリスク状況のアセスメント、1カ月の産褥・新生児健診の100%把握においては50%程度とシステム整備の課題が示された。

助産師のこども虐待に対する認識のうち、1回の行為でも虐待と判断するのは、「配偶者や同居人などが虐待行為を行っているのに放置する」「子どもに慢性の病気で生命の危機があるのに病院に行かない」は86.8%、「遊んで家に帰らず小さな子どものせわをしない」「適切な食事を与えない」が64.7%で6割以上の肯定を示していた。

A 研究目的

こども虐待の発生予防、早期発見・早期対

応を行うために、周産期における妊産婦ケ

アに携わっている助産師が支援しているこ

ども虐待ボーダーラインの実態を明らかにすることを目的とした。

我々が実施したこども未来財団の平成23年度調査研究事業「こども虐待ボーダーライン事例支援の経時的変遷に関する研究」(1-3)では、保健師より支援を受けた事例の分析を行った。支援を受けたこども虐待ボーダーライン事例では、転入転出の事例が42%、母親に精神疾患がある事例が19%、知的障害のある事例が15%、生活保護を受給している事例が33%という問題や背景を有していることが明らかとなっている。この結果を反映し、周産期の妊産婦ケアに携わる助産師においても、同等の状況が存在することが考えられ、あわせて支援の実態を明らかにするために調査に取り組んだ。

B 研究方法

(1) 調査期間：平成26年12月から平成27年2月

(2) 対象者：九州地区5県37施設の助産師68名。福岡県、佐賀県、長崎県、大分県、沖縄県から回答が得られた。

(3) 調査内容

基本属性(性、年齢、経験年数、他)、こども虐待に遭遇した経験の有無と頻度(虐待種類別の経験事例数)、H25年度の子ども虐待種類別の支援ケース数(新規、継続)、支援によってこども虐待が予防できることの認識、こども虐待事例の把握方法、こども虐待事例支援で連携をとった機関、職場のこども虐待の予防や支援対策、こども虐待認識尺度31項目について等であった。

(4) 分析方法：統計解析ソフトを用いて記述疫学分析を行った。

C 研究結果

郵送法による調査票の回収数は68名、

回収率は51.5%であった。

こども虐待への関心があるものが92.6%、こども虐待を疑う母子の事例を経験したものは42.6%、ネグレクトの母子事例を経験したものは30.9%であった。

【こども虐待事例の経験の実態】

こども虐待事例の経験の実態は、事例実数87人、平均は1.3例で、最少0事例が60.3%と大部分を占め、最大が10-15事例であった。(表1)

平成25年度にこども虐待支援の経験があったものは10名14.7%であった。25年度の事例実数は11例、平均支援数は1.1事例、1-2件の範囲であった。新規事例は9例81.8%であり、継続事例は3例27.2%であった。H25年度に支援している事例の平均支援年数は3.4年、中央値は3年、最長は12年であった。

子ども虐待ボーダーライン事例を助産師が把握する方法は、表2の通りである。妊婦の定期健康診査50.0%、産褥入院期間中の母子の観察42.6%、産褥期の母親の健康診査および電話訪問30.9%、新生児の健康診査・電話訪問20.6%がその契機になっており、分娩経過中や分娩室での母児対面を通して把握に至っている事例も示された。

【こども虐待事例における支援】

今まで経験したネグレクト事例や育児困難事例の母親の背景として、育児支援者がいない47.1%(保健師67.3%)、経済的困窮がある45.6%(保健師69.6%)、実家と不仲である27.9%(保健師52.1%)と生活上の問題が指摘され、加えて母親に精神疾患の未治療がある事例26.5%(保健師62.1%)、母親に知的障害がある23.5%(保健師60.8%)、被虐待歴がある17.6%(保健師49.1%)で

保健師と相似した結果であった。保健師の結果から示された転居が多い事例経験は5.9%(保健師 34.3%)であった。(表3)

こども虐待を予防するための事例支援で連携している機関は、保健所 38.2%と市町村 23.5%、児童相談所 26.5%であった。(表4)

【助産師のこども虐待事例に対する対応】

助産師のこども虐待事例に対する対応では、関係の地区担当者・部署に連絡する 77.9%、ケースカンファレンスを開催する 66.2%、助産師や医師、MSW などチーム対応を相談する 52.9%、プライマリーと上司で協議する 48.5%、児童相談所に通告する 36.8%であった。

虐待に対する対応システムの整備として、虐待に関するチェック項目をカルテに記載している 19.1%、事例発生時の対応についての取り決めやマニュアル作成は 13.2%、妊娠届や母子健康手帳交付時の助産師の面接 47.1%、退院時のハイリスク状況のアセスメント 51.5%、新生児の健康診査・電話訪問の助産師による対応 75.0%、1カ月の産褥・新生児健診の 100%把握 55.9%とシステム整備の課題が示された。母親・乳幼児の家庭訪問は 2.9%であった。一方、母乳ケアや育児の継続支援システムは 88.2%、助産師外来の開設は 51.8%が有していた。

【助産師のこども虐待に対する認識】

助産師のこども虐待に対する認識のうち、1回の行為でも虐待と判断することに6割以上の肯定を示していた項目は、「配偶者や同居人などが虐待行為を行っているのに放置する」「子どもに慢性の病気で生命の危機があるのに病院に行かない」が 86.8%、「遊んで家に帰らず小さな子どもの世話をしない」「適切な食事を与えない」が 64.7%であ

った。(表5)

D 考察

助産師の4割にこども虐待支援経験があった。こども虐待事例の経験の実態は、事例実数 87 人、平均は 1.3 事例で保健師の調査で明らかとなった 14.6 ± 76.7 事例とは大きな乖離がみられた。

助産師が勤務する地域や施設の規模により、また担当している業務内容により支援数に違いがあると考えられ、一方で事例経験のない助産師もいる。

小林は4) こども虐待の背景には養育者である母親の生活や健康問題が存在すると報告している。本研究においても、助産師が経験した、こども虐待支援事例の半数以上が母親に生活や健康の問題がある事例であった。経済的困窮、精神疾患、知的障害、被虐待により生活や健康に問題を抱える母親への支援の実態は、地域の保健師の抱える実態やその把握の方法において少し異なった様相が存在していた。

虐待に対する予防や対応システムの整備については、助産師の臨床実践や活用が十分に発揮されている領域と、今後の課題や展開が期待される状況が示されている。

助産師による母親への育児支援は、母親の周産期における健康課題に関わる改善と同時に、こども虐待予防にかかわる重要な役割であると考えられる。

助産師のこども虐待に対する認識では、生命に関わる虐待は 60%以上が1回の行為でも虐待と判断することに肯定的であった。研究課題であるネグレクト事例においては、泣き声への対応、乳幼児をなでる・

あやす・抱く行為といった育児行為としての頻度や質の分析も重要であり、今後の詳細な検証が望まれる。

周産期における妊産婦ケアに携わっている助産師がこどもの虐待を早期に発見し、予防へと結び付けていく体制をさらに充実整備することが重要であろう。

E 結論

1) 助産師は、疑いを含むこども虐待事例について平均経験数 1.3 事例であり、1~2 事例が主であった。

2) 助産師の支援事例では経済的困窮、育児支援者がいない、実家と不仲である、精神疾患未治療、知的障害、被虐待経験があるなどの生活や健康に関する問題を持つ事例の特徴を有していた。

3) 助産師の 3 割強が、職場のこども虐待の予防や支援対策をある程度できていると評価しているが、マニュアルの整備や新生児定期健診の未受診者のフォローなどシステム整備の課題も示された。

4) 助産師のこども虐待に対する認知では、生命に関わる虐待については 60%以上が 1 回の行為でも虐待と判断していた。

F 健康危機情報

特になし

G 研究発表

平成 26 年度は該当なし

研究協力者

吉永一彦（福岡大学医学部社会医学系総合研究室・講師）、外間知香子（琉球大学医学部保健学科・助教）、鎌田久美子（福岡県系

島保健福祉事務所・副所長）、中牟田静子（佐賀市・参事）、山口のり子（田川市・係長）、南里真美（小城市・係長）

引用文献

1) 小笹美子, 斉藤ひさ子, 長弘千恵・子ども虐待ボーダーライン事例支援の経時的変遷に関する研究・子ども未来財団平成 23 年度児童関連サービス調査研究事業報告書・(2012)

2) 小笹美子, 長弘千恵, 斉藤ひさ子, 外間知香子, 屋比久加奈子, 當山裕子・保健師が支援を行っているこども虐待ボーダーライン事例の特徴・第 71 回日本公衆衛生学会総会・(2012)

3) 小笹美子, 長弘千恵, 斉藤ひさ子・こども虐待に対する保健師の支援 事例経験による検討・日本看護学会論文集地域看護・42 号・46-49・(2012)

4) 小林美智子・子どもを護る母子保健の現状と課題 子どもを護る観点から・公衆衛生 75 (3)・187-196・(2011)

表1 子ども虐待事例の経験例数 N=68

支援経験数		人	%
事例経験なし		41	60.3
事例経験有	1事例	6	8.8
	2事例	9	13.2
	3事例	2	2.9
	4事例	1	1.5
	5～9事例	4	5.9
	10～19事例	3	4.4
	20～29事例	0	0.0
	30～49事例	0	0.0
	50事例以上	0	0.0
	未記入	2	2.9

表2 支援事例の把握方法

把握機関	助産師 N=68		保健師 N=800	
	人	%	人	%
妊婦の定期健診時	34	50.0	-	-
産褥入院期間中の母児	29	42.6	-	-
産褥期の母親健診・電話訪問	21	30.9	-	-
新生児健診・電話訪問	14	20.6	-	-
分娩室の母児対面	14	20.6	-	-
分娩経過中	11	16.2	-	-
乳児健診・訪問	8	11.8	355	44.4
妊娠届・母子手帳交付時	7	10.3	348	43.5
医療機関からの依頼	5	7.4	444	55.5
福祉事務所からの依頼	5	7.4	207	25.9
関係機関からの依頼	4	5.9	572	71.5
同室者・家族・知り合いの連絡	4	5.9	-	-
3歳児健診	2	2.9	374	46.8
1歳6か月児健診	1	1.5	375	46.9
住民からの連絡	-	-	372	46.5
乳児全戸訪問	-	-	317	39.6
新生児訪問	-	-	316	39.5
出生届時	-	-	111	13.9
未熟児養育医療申請時	0	0.0	51	6.4
小児慢性疾患申請時	0	0.0	26	4.5
その他	4	5.9	113	14.1

表3 ネグレクト事例の支援について

N=68

	人	%
ネグレクト事例の支援経験あり	21	30.9
背景		
育児支援者がいない	32	47.1
生活困窮	31	45.6
実家と不仲	19	27.9
精神疾患未治療	18	26.5
知的障害あり	16	23.5
被虐待経験がある	12	17.6
転居が多い	4	5.9
その他	12	17.6

表4 支援事例の連携機関

N=68

連携機関	人	%
保健所	26	38.2
児童相談所	18	26.5
市町村	16	23.5
警察	5	7.4
福祉事務所	4	5.9
医療機関	3	4.4
家庭児童相談室（課）	2	2.9
婦人相談所	1	1.5
保育園	0	0.0
幼稚園	0	0.0
母子保健推進員	0	0.0
民生児童委員	0	0.0
その他	0	0.0

表 5 助産師のこども虐待に対する認識 (%) N=68

	一回でも虐待だ	時々起れば虐待だ	頻繁に起れば虐待だ	特に問題ない 不適切だが虐待ではない	無回答
転居をくり返す	1.5	5.9	22.1	64.7	5.9
大声でどなる	1.5	20.6	48.5	23.5	5.9
母親の視線と乳児の視線が一致しない	2.9	26.5	30.9	33.9	5.9
乳幼児をあやしたり、抱いたりしない	2.9	30.9	48.5	13.2	4.4
乳幼児の頭、身体をなでる行動がみられない	2.9	17.6	26.5	48.5	4.4
子どもの泣き声に対応しない	7.4	10.3	61.8	16.2	4.4
母親の注視が乳児に向けられていない	7.4	10.3	63.2	14.7	4.4
親の帰りが遅いため、いつも子どもだけで夕食を食べている	7.4	8.8	33.8	42.6	7.4
理由なく、子どもを保育所に連れて行かない	10.3	32.4	25.0	20.6	11.8
「本当に育てにくい子どもだ」といい、あまり世話をしない	16.2	44.1	33.8	1.5	4.4
子どもに不衛生な服を着せている	17.6	39.7	30.9	7.4	4.4
子どもの虫歯の治療をしない	19.1	30.9	14.7	29.4	5.9
母親が「望まない妊娠、出産だ」という	22.1	22.1	29.4	22.1	4.4
高熱を座薬等により無理に下げ、保育園や学校に連れて行く	22.1	27.9	17.6	26.5	5.9
子どもを保護して欲しい等と養育者が相談してくる	23.5	14.7	14.7	38.3	8.8
子どもの表情がとぼしく、体重増加が良くない	26.5	29.4	14.7	23.5	5.9
子どもをつねる	29.4	36.8	25.0	4.4	4.4
親に精神疾患や強いうつ状態があり、全く面倒をみない	30.9	20.6	19.1	23.5	5.9
買い物をする間、子どもを車の中に残しておいた	32.4	20.6	19.1	20.6	7.4
子どもが精神的に不安定なのに、専門的な診断や援助を受けに行かない	33.8	29.4	16.2	11.8	8.8
家出した子どもが帰ってきてても家に入れない	35.3	25.0	16.2	14.7	8.8
理由がなく健診などを受けない	41.2	29.4	19.1	5.9	4.4
極端に不潔な環境の中で生活させる。	44.1	27.9	19.1	2.9	5.9
ギャンブルや酒でお金を使い、子どもの給食費や保育料が払えない	52.9	25.0	11.8	5.9	4.4
夜幼い子を寝かせつけて、子どもを置いて遊びにでかける	55.9	17.6	14.7	5.9	5.9
子どもが刃物で遊んでいるのに、止めない	58.8	13.2	7.4	14.7	5.9
子どもの世話を嫌がり、食事を与える回数が少ない	60.3	33.8	1.5	0.0	4.4
適切な食事を与えない。	64.7	23.5	7.4	0.0	4.4
遊んでいて家に帰らず、小さな子どもの世話をしない	64.7	29.4	1.5	0.0	4.4
同居者などが虐待行為を行っているのに、それを放置する	86.8	8.8	0.0	0.0	4.4

子どもに慢性の病気で生命の危機があるのに病院に連れて行かない	86.8	8.8	0.0	0.0	4.4
--------------------------------	------	-----	-----	-----	-----
